

二〇一五年度 入学試験問題
一般第一回・帰国児童入試

国語

注 意

- 1 問題は 一・二 の二題あります。
- 2 試験時間は五〇分です。
- 3 答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 4 受験番号は算用数字で記入しなさい。
- 5 試験場の先生の指示があるまで、問題を開いてはいけません。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

まったく経験がないのに、私は月刊の英文学専門誌「英語青年」の編集をまかされた。何から何まで独りでしなくてはならないのだから途方にくれた。やはりいちばん苦勞なのは校正だった。いくら入念に見たつもりでも、誤植が残る。再校、三校と三度校正をする。朝から晩まで数日は、「赤字生活」だと自嘲した。

だんだん目がしょぼしょぼしてくる。もともと強い近視だから、校正なんかうまくできるわけがない。目がうまく定まってくれない。横組の校正ゲラを見るのだが、一行の途中で下の行へ視線が落ちかける。

しかたがない。行の下にモノサシを当てる。これで視線の転落は防げる。どうしても下の行へ視線が落ちそうになるのか。考えるともなく考えていて、横組のせいらしいという見当をつけた。横組の文章を読むとき、視線は一直線に左から右へ走らないで、包丁でものを刻むときのように、いちいちタテ①に見てヨコに移ることをつづける。それで、視線が下の行に落ちそうになるらしい。そこで、かすかに、日本語は横組にしてはいけないのではないかという疑いをもった。

こういう編集を始めたのは昭和二十六年からである。一年して昭和二十七年に内閣訓令が出て、これから公文書はすべて横書きにすると宣言した。

なぜ、それまでタテ書きだったものをヨコにしたのか。理由は事務の合理化だという。なぜヨコ組みにすると事務の合理化になるかという、タイプライターのせいだった。

当時の邦文タイプは欧文タイプを模したもので、横書きに適していて、タテ組にするとひどく手間がかかる。すべて横書きなら事務のノウリツも上がる、というのである。

戦争に負けて、食うや食わずの生活をしいられていた国民にとって、立っていることが横に寝たって、大したことではないと考えたのだろうか。このヨコ書きの訓令が問題にされることはなかった。

私はさきにもべたように、横組日本語の校正に苦しんでいたから、その内

前にもべたように、私は横組のゲラの校正をしていて、もともとよくなかった眼を決定的に悪くしてしまった。エッセイを発表、日本語のヨコ書き不可を訴えたが反響はまったくなかった。日本語を大切にすることができない、黙ってられないはずだと、英語の勉強をした人間が考えるのに、無視されてはなはだおもしろくない。

国語の専門家が知らん顔しているのも不思議なくらいである。国立国語研究所はいろいろの研究をしているようであるが、日本語のヨコ書きについて見解を示したことはないようである。

国語を教えている人たちはもちろん意見があるだろう。あるならなぜそれを発表しないのか。ことは国語のコンカンにふれると見るべきだろう。ヨコにした日本語はタテの日本語と違うことばであるという判断を下すことができないでは、国語を愛しているとは言えない。国語の先生たちが声をあげないから、一般の人は問題があることすら知らない。

横組の国語辞書が出て話題にもならない。横組の小説が芥川賞を受賞するまでになった。

それとは別に、先年、早稲田大学が入試の国語の問題をヨコ書きにした。このときは、新しがりやの全国紙が批判的であった。びつくりしたのか、大学は翌年から、もとのタテ書きに戻した。

その時点では、新聞は、ヨコ書きを容認していなかったのだが、それは、読者の読みやすさを考慮したものとして注目される。

同じ文章でもタテ書きとヨコ書きでは感じが違うことは、すこしことばの勉強をした人ならわかるのである。ヨコ書きの科学的文章が親しみにくい感じを与えるのも、内容だけではなく、ヨコ書きという形式と関係がありそうだ。

書く側でも、タテ書きとヨコ書きでは勝手が違うはずである。ヨコ書きなら執筆しないという文章家がかつてはすくなくなかったが、いまだって、まったくなくなっているのではないのか。

読みの与える印象は、ただ、視覚にかかわるだけでなく、それにつらなる心理的な影響も見のがせない。タテに流れることばのイメージは、ヨコに動く

閣訓令がボウキヨであるように思われた。

役人が、ことばをよく知らないから、タテのものをヨコにするくらい、なんでもない、と考えてもしかたがなかった。文章を書く人、新聞雑誌の関係者が知らん顔していたのは、はなはだ不可解である。

文字を読むとき、目は、視線と直角に交わる線によって文字の識別を行なう。

一、二、三

はタテに読むようになっていく。視線は字画と直角に交叉する。はつきり区別できる。これをヨコに並べてヨコから読むとどうなるか。視線と字画が平行になってしまつて、識別の役に立たない。つまり、たいへん見にくくなる。もともとタテ読みを前提として作られている文字は、ヨコにしてはいけないのである。

ヨーロッパのことばの文字は、ヨコ読みに対応してタテ線が基本になっている。日本語の一、二、三に対して、

I、II、III

のようになる。いくら酔狂な人でも、これをタテに読もうなどと考えることはない。日本はその酔狂なことを国で制定してしまつたのだからおどろく。

日、月、鳥、鳥、木、本、米、末

など、ヨコ線で区別されている。これをヨコに並べれば目の負担が大きくなるのはわかり切つたことである。

へ 中 略 へ

ことばの感じとはつきり異なる。

④* 浜までは海女も養着る時雨かな 瓢水

の情緒は、ヨコ書きにすれば、かなりハッキリ異なつたものになるだろう。俳句が行きづまつているというように考える人は俳句界内外にすくなくないと思われるが、いくら革新的でもヨコ書きを肯定するところまではいくまい。かりにそうなるとしても、長い時間が必要であると考えられる。

短歌も同じことが言えるが、抒情性をいつそうあらわにしているだけ、ヨコ書き短歌は深刻な問題をもっていると想像される。

短詩型文学はタテのことばで立っているのが真骨頂である。⑤へたに寝させたりしては、命が危い。

俳句、短歌に限らず、日本の古典は立っていることばで生きている。不用意に寝させたりすれば、ジャンルのいのちにかかわるかもしれない。

「源氏物語」を横組に印刷したら、どういう味あいになるか。よくないにきまつているから、試みる人はいないだろう。タテでもヨコでも、同じことが書いてあるなら、同じだというような鈍感な感性が一般的になつたら、文化の個性はすたれ、喪失されたとするほかないだろう。

ことばの書き方を変えろということとは、もともと、革命的なことである。まつとうなことばの文化をもつていれば、そもそも、そんなことは考えない。ヨコ書きをしていることばをタテ書きにした、というような例は、古来、なかったのだろう。そんなことを考えること自体が、⑥である。これから、そういうことは起こらないのが正常である。

日本は、明治以来、いく度となく、ことばを変えた。それを改良のように考えたらしくもあるが、とんでもない文化破壊であり、よきナシヨナリズムの放棄であるということ反省すらしなかった。

ヨーロッパ語は言文一致である、と速断、日本語を無理やり、言文一致させ

ようとして多くの人が苦勞した。どだい無理なことで、不完全な言文一致も達成されていない。そのために日本人の失った知的エネルギーはかり知れない。段落をつけたり、句読点をつけたりするようになったのも外国語の模倣で、そのために日本語の性格が歪んだかもしれないとは、考えることもなかった。いちばん大きな改変は、日本語のヨコ書きを始めたことである。ヨコ書きは、さきに書いたように昭和二十七年の内閣訓令に始まったのではない。実は、明治早々、大学が先鞭をつけたのである。昔の大学はテキストがないから、教授の講義を学生は筆記するのである。それがヨコ書きであった。国文学の講義でも、ヨコ書きでノートをとったという。そういうノートが大学ノートと呼ばれて後々までも親しまれた。さすがにこのごろは、大学ノートと言わなくなったが、それは、教授が学生に書きとらせる講義ノートを作らなくなった、作れなくなったからである。

ヨコ書きにすると、文字が乱れる。きたなくなる。下手になる。戦前のことだが、小学校の本科正教員は、みんなすばらしくきれいな楷書を書くことができた。黒板に白墨で書く字は、なにもわからないこどもにも美しいと思われた。ところが、大学を出た先生はまるでお話にならない。楷書が書けないのだから、行書のかきそこないみたいな字を板書する。こどもたちは、その文字を見て、代用教員はダメだという印象を受けた。

日本語はタテに書くようにできているのに急いでヨコ書きにしてノートをとれば、文字が崩れるのは当たり前である。

それに目をつぶらせたのは、外来文化信仰の高等教育のケンイであった。そのことは現代に至るもお充分に反省されてはいない。タテのものをヨコにすれば、姿が悪くなるくらいではすまされない、もっと深いところが侵される。それを意識しなかったのは、後進文化として是非もない、と言つてすまされることではない。

（外山滋比古「タテとヨコ」）

（注） *校正……仮に刷った印刷物（ケラ）と原稿とを比べあわせ、文字のまちがいなどを正すこと。

*タイプライター……キーボードを操作して、文字を紙に打ち出す器械。英語などの欧文用と、日本語のための邦文用とがあった。

*浜までは海女も養着る時雨かな……浜に出るまでは、海にもぐって貝などを取る海女も養（わらでできた雨具）を着てゆく、時雨（冬の雨）だなあ。

問一 傍線部イ、ニのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「タテに見」という表現を、「視線」という言葉を使って言いかえた部分を探し、抜き出しなさい。

問三 傍線部②「タテのものをヨコにする」とありますが、これは「縦のものを横にもしない」という慣用句をもとにした表現です。もとの慣用句としての意味を説明しなさい。

問四 傍線部③「酔狂な」の意味を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 酔っぱらっている イ ものずきである
ウ 気がおかしくなっている エ わけがわからない

問五 傍線部④の俳句について。この俳句から受ける「タテに流れることばのイメージ」として適当でないと考えられるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音の流れがなめらかで、その音からわきあがってくるイメージ
イ 音のごつごつした印象をもとに、ひとつひとつ確認するイメージ
ウ 状況を少しずつ明らかにしながら軽やかに描き出していくイメージ
エ やまことばのやわらかなリズムから受けるさわやかなイメージ

問六 傍線部⑤「へたに寝させたりしては、命が危い」とはどういうことですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 短詩型文学は、字数が少なく、一文字一文字がなう視覚的影響が大きいから、横書きはふさわしくない。
イ 短詩型文学は、視覚的なわかりやすさに加えて、論理的な流れを重視するから、横書きでは成り立たない。
ウ 短詩型文学は、視覚による読みやすさだけでなく、心理的なイメージも抒情性に関わるから、横書きではいけない。
エ 短詩型文学は、抒情性を重視しているから、横書きを受け入れるには長い時間が必要であり、当分は横書きにできない。

問七 空欄⑥に当てはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 革命 イ 鈍感 ウ 異常 エ 改良 オ 喪失

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

完全にバラバラだった。
櫛歯もシリンダーも香箱も、A それらを取り付けていた台座も外されている。ネジ止めされている箇所だけでなく、外せそうなところはほとんど解体されていた。胡桃材のケースの中には細かな部品が散乱している。

「見事ですネ」

私は言った。皮肉のつもりではなかったが、目の前の男性——杉岡千晴は居心地悪そうに肩を揺らした。

「息子がやっただんです」

杉岡は申し訳なさそうに言った。三十代半ばくらいに見える。痩せていて背は高く、髪を短く刈っていた。

「ちょっと眼を離れた隙に、こんなに分解してしましまして」

その息子は、彼の傍らに立っていた。八歳くらいだろうか。青いタータンチェックのシャツにデニムのショートパンツを身に着けている。父親によく似た丸顔で、下顎に黒子がひとつあった。私の仕事場にひどく興味を持った様子で、あちこちを熱心に見回している。

「これ何？」

子供が指差したのは、修理に取りかかっていたポリフォンのテーブルモデルだった。私は言った。

「オルゴール」

「嘘。こんなに大きいのに？」

「昔は、こういうものがいろいろ作られていたんだ。今でも一部で製造されているけど」

B 仕事場に入れるべきではなかったと後悔しながら、私は答える。思ったとおり子供の興味はそれだけで収まらないようだった。

「どうやって鳴らすの？ この丸い何？ やっぱりゼンマイで動くの？ 昔ってどれくらい昔？ 音、出る？ 鳴らしてみせて」

「健太」

私は言った。

「触りたいなら、首のあたりを優しく」

健太は言われたとおりにした。ステラは大人しく触られるままになっていた。

「この子、なんて名前？ オス？ メス？」

「ステラ。女の子」

「ふうん……」

健太は真剣な眼付きでステラを見ながら首筋を撫でている。

「なんて種類？ 柴犬？ どこで買ったの？」

「柴に似ているが雑種だよ。買ったんじゃない。動物保護センターで貰ってきた」

「保護センターって？」

「捨てられたり、引き取り手のいない犬や猫を保護している施設だ」

「迷子の犬とかも？」

「そういうのも、いるかもね」

「健太。いい加減にしないか。行くぞ」

杉岡が息子を立たせた。そろそろ彼の質問攻めに応じることが耐えがたくなっていたので、内心ほっとした。

杉岡親子が帰った後、妻が仕事場にやってきた。

「どうだった、あのお客さん」

「疲れた。人間の相手は苦手だ。それが子供となると、もっと苦手だよ」

私が言うと、妻は笑いながら親子の持ち込んだオルゴールを眺めた。

「リュージュ？」

「いや、日本製だ。三十弁の普及品」

「それにしても、本当にバラバラにしちゃってるのね」

「機械好きな子供なら、よくやる悪戯だ」

「あなたも、した？」

「ああ、家にあったラジオとかカメラとかを壊して怒られた」

「じゃあ、あの子もあなたみたいになるのかしらね」

① 父親が窘めるように言った。それでやっとう子供の質問は止まる。

「失礼しました。それで、直りますかね？」

私はあらためて分解されたオルゴールを検分した。

「部品が全部揃っていれば、それほど時間も掛からずに直せます。もし欠落していても、現在でも販売されている製品ですから部品の調達は難しくないので、少し時間を貰えれば直します」

「そうですか」

杉岡は安堵したのか、頬を緩めた。

「これ、親父がプレゼントしてくれたものなんですよ。孫——健太が生まれた記念につて。なのにこんなにしてしまつて、あの世の親父に申しわけなくてね」

亡くなられたのですか、と訊きかけて、やめた。ここに持ち込まれるオルゴールには、それぞれ事情がある。何百万円もするアンティーク・オルゴールでも、杉岡が持ち込んだ三万程度の製品でも、同じように。そのひとつひとつの物語にいちいち興味を示していたら、こちらの身がもたない。私は言った。

「修理が終わったら連絡します」

「よろしくお願いします」

杉岡は頭を下げ、まだあたりを見回している息子の頭を掴んで無理矢理下げさせた。

そのとき、仕事場のドアを押し開けてステラが入ってきた。来客があるのに気付くと少し驚いたように立ち止まったが、すぐに尻尾を振ってみせた。

「わ」

驚いたように健太が声をあげる。犬嫌いなのかと思ったが、逆だった。彼はすぐさましゃがみ込んでステラに手を伸ばした。ステラは急に手を出されてびっくりしたのか、身を引いた。

「健太、やめなさい」

再び杉岡が窘める。C 健太はさらに手を伸ばし、ステラの頭に触ろうとした。

「いきなり頭はいけない」

「ならないほうがいい。苦勞する」

「誰が？」

「あの子自身と、周囲が」

「……たしかにね」

妻はまた、笑った。

「ケーキを買ってきたの。食べましょう。ステラ、あなたもいらつしやい」

やっとう春めいた日が何日か続くようになったが、それでもまだ暖房は欠かせない。

ステラはファンヒーターの温風が吹きつける場所を選んで、ごろりと寝そべった。

「そんなところにいると鼻がカワイイちゃうわよ」

妻が言っても、もちろん動く気配はない。

コーヒーは私が淹れた。

「勝手に仕事を引き受けちゃったりして、いけなかったかしら」

ショートケーキをテーブルに置きながら妻が訊く。私は首を振った。

「いや、たまにはこういうのも、いいかもしれない」

オルゴール専門の修復師を生業としているが、別に家の前に看板を掲げているわけではない。主に修理するのは高価なアンティークもので、オルゴールの収集家から依頼を受けるのが普通だ。市販されている安価なオルゴールを修復することはあまりないし、そもそもそういうものを直したいと思う人間も少ない。

今回は特別だった。妻が町内会の集まりに出て——そういう仕事はすべて彼女にマカせていた——そこで夫の職業を訊かれ、「オルゴールの修理をしています」と答えた。するとそれを聞きつけたひとりが「だったら直してほしいものがあるのだが」と話しかけてきた。それが杉岡千晴だったというわけだ。「一緒に来てた子、あの子が壊したのよね。お父さん、愚痴ってたわ。家にあるものをあれこれ分解されて困ってるって」

「好奇心旺盛、ということか」

「機械だけじゃないって。奥さんが買ってきた秋刀魚を自分で切り開いて解剖してたそうよ。横に魚の解剖図をノセた図鑑を置いて見比べてたんだって。他にも夕食の後で急に寝転がったから『眠いならベッドで寝ろ』って言ったら『眠いんじゃない。食べてすぐ寝ると本当に②になるかどうか確かめてる』って言ったんですって。面白いわね」

妻はそう言いながらケーキをフォークで切り分け、口に運んだ。

ステラが少し覚束ない仕草で起き上がり、私たちの足元にやってきた。私と妻を交互に見ながら、どちらが先におこぼれをくれるか見守っているようだ。

妻がスポンジを少し分け、ステラの鼻先に持っていく。ぱくり、と音がする。ような勢いで食べた。そして今度は私の近くにやってくると、前足で私の膝を叩いた。

「ちょっと待て」

クリームが付かないように気を付けながらスポンジを切り取り、一口だけ食べさせた。ほとんど味わうこともなく呑み込む。

「明日またステラを獣医さんに連れていかなきゃね」

妻が言った。

「葉もなくなったし、一応傷口も見てもらいたいし」

「ああ」

頷きながら、またファンヒーターの前に戻って寝転がったステラを見る。

一度剃られた腹部の毛がまた伸びはじめ、下腹部の傷口は見えなくなっている。それでもあの日以来、私の中に居ついた罪悪感、消えることはなかった。

ステラが体調を崩したのは一ヶ月前のことだった。下痢と嘔吐を同時にして、起き上がらなくなった。慌てて獣医に連れていき診てもらった結果、子宮蓄膿症と診断された。文字どおり子宮が炎症を起こし膿が溜まる。出産経験のない中高年齢期の犬に多い病気だと言われた。相当悪化していて薬品投与ではどうにもならないので、手術で子宮と卵巣を切除することになった。

手術は無事に終了し、傷口の抜糸も済んだ。抗生物質の投与と定期的な診察

は必要だが、ステラはすでに回復している。しかし私は、自分の中に治りきらない傷の疼きを感じていた。ステラがあんなになるまで気付かず放っておいたこと、そして何より、病気の予防をしてやれなかったことが、強い後悔の念として私を苛んでいる。

ステラを保護センターから引き取ってきたとき、避妊手術をするべきかどうか一度は考えていた。子犬を産ませるつもりはなかったし、早期に去勢しておけば乳腺腫瘍など婦犬科系の病気にも罹らずに済むことも知識として知っていた。

しかし私は、結局手術をさせなかった。健康な体にメスを入れることにためらいを覚えたからだ。要するに、怖じ気づいてしまったのだ。

結果、ステラが一番苦しい状況で手術を受けさせなければならなくなった。そのことを思うたび、ステラに対して申し訳ない気持ちでムネが詰まる。私はステラを苦しめてしまった。飼い主として失格だ。

「またステラのこと、悔やんでるでしょ」

妻に言われた。

「わかるわよ。泣きそうな顔でステラを見てるんだもの。でもあんまり思い詰めないで。わたしたちはできるだけのことをしたんだし、あの子も元気になったわ」

「わかってる。でも……」

「完璧な飼い主なんていないわ。完璧な人間がいないように。あなただけが完璧を目指さなくてもいいの」

妻の言葉は正しい。自分が完全無欠でないことは誰よりも私自身がよく知っている。そうでなければならぬと思うことは傲慢であることも理解している。しかし。

そう「しかし」だ。この「しかし」がいつも私を苛む。

「……散歩に行こうか」

声をかけると、ステラは起き上がった。以前ほど機敏な動きではないが、散歩という言葉には敏感に反応する。

問五 傍線部③について。なぜ「私」は「罪悪感」を抱いているのですか。文中の表現を用いて説明しなさい。

問六 次のア～エそれぞれについて、本文の内容に当てはまるものには○、当てはまらないものには×をつけなさい。

ア 「私」は、子供の相手は苦手だと思いつながら、健太の好奇心には理解を示している。

イ ステラのことで後悔している「私」を、健太にいやしてもらおうと妻は期待した。

ウ 何でも自分で確かめてみないと気が済まない健太に対し、父親はほとほと手を焼いている。

エ 「私」は、後ろめたさからステラを大切にしているので、触ろうとした健太を止めた。

問一 傍線部イ～ニのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A C に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア やはり イ しかし ウ もちろん
エ たぶん オ そこで

問三 傍線部①について。何を「窘め」ようとしたのですか、答えなさい。

問四 空欄 ② に当てはまる漢字一字を答えなさい。

受験番号
氏 名

得 点

小 計

—

問一	イ	ロ	ハ	ニ
問二				
問三				
問四				
問五				
問六				
問七				
問八	ア	イ	ウ	エ

小 計

二

問一	イ	い	ロ	せ	ハ	せ	ニ
問二	A	B	C				
問三							
問四							
問五							
問六	ア	イ	ウ	エ			